

法然と明恵

——兩者に於ける信の様相——

梅庭 昭 寛

鎌倉期の佛敎界を見る時、新敎團の創立と舊佛敎の復興運動とが二大主流となつたことは周知の如くであるが、これら兩運動の旗手としての位置を占める法然と明恵の信の様相を檢討してみることは、兩者の敎學基盤の背反があるとはいへ、鎌倉佛敎思想を考察するに際して看過できないものと思われる。

明恵が淨土敎に關心を寄せた頃の述作である『摧邪論』に於ける法然淨土敎批判の論點を見る時、その對立は敎學理論以前の段階に横たわる兩者の人間觀、社會觀に根ざしている點が少なくないと考えられる。従つて法然・明恵の人間觀・社會觀を比較檢討することによつて、兩者の敎學思想と信仰態度が如何に呼應しているものであるかを一考してみたい。法然、明恵の淨土敎に關する思想的對立は、第一に彼等の人間觀に端を發するものと見られる。即ち法然は「凡夫の心は物に隨ひて移り易し、喩に猿のごとし、まさに散亂して動きやすく、一心しづまりがたし（中略）ここにわがごときは、すでに戒定慧の三學のうつはものにあらず」と述べたる如く、法然にとつては人間が有する自力の可能性に對する限界の認識が西方の淨土へ向わんとする信の出發點となるのである。これに對し明恵は「我心ハ猿猴ノ如シ、十方ニ馳散ス」として法然と同じく人間の心の定まり難き様を認めるのであるが、人の心（＝信の態度）が散じ易

いものであればこそ「持戒ノクサリヲモテ、佛ノ柱ニユヒツケレハ、タノモシキ」ものであることを強調するのである。斯様な兩者に於ける人間觀の相違、即ち自力の絶望の深まりを経て信の態勢が強固なものとなつた法然と、自力の可能性に對する飽くなき挑戦で信の確立を目指した明恵の立場とは、人間が生を營む場としての「現世」に對する認識内容の異りに於て更に顯著なものを見せるのである。法然の觀じた現世は、あくまでも「念佛の申されん様にすぐべき」ためのものに他ならない。即ち「現世をすぐべき様は、念佛の申されん様にすぐべし。念佛のさまたげになりぬべくば、なになりともよろづいとひすて、これをとむべし」と説く様に、法然にとつての現世は、生死輪廻の一課程にすぎるものではなく、念佛の申されん様にすぐべきことに於て意義あるものとなるのである。即ち來世に従屬し、來世への橋わたしとなつて人間が過ぎねばならぬ時間的一切片に見做されている。一方明恵の觀する現世は極めて重要な價值をもつものとなつている。即ち「我ハ後世タスカラムト云者ニアラス、タ、現世先ツアルヘキヤウニテアラント云者云々、意ハ、指タル行業モナク、懈怠ニシテ、ユヘナク後世タスカラムト云トモカナハシ、タ、現世ニ行業モアリ、精進勇猛ナラハ、後生ハタトヒタスカラムト云トモ、無力出離スヘキナリ、懈怠ニシテ罪業ヲノミツマンモノ、ユヘナク後生タスカラムト云ムカ、無力三途ニ墮センカ如シ」と述べて現世を優先重視せる立場をとるのである。斯様に法然が現世を「すぐべきもの」という時間的次元と見做すに對し、明恵の把握した現世は「あるべきもの」、即ち人間がその定かなる大地に足を踏まえて勇猛果敢に修道を行ふべき「場」として重視されている。

法然、明恵に於ける人間觀・社會觀の斯様な對稱的立場は、兩者の基本的な信仰理念である三心・菩提心と密接な關係をもつているものと考えられる。明恵が『摧邪輪』で明らかにした選擇集批判は、法然が菩提心を輕視する點に集中されているのであるが、その批判を展開する端緒として選擇集で論ぜられる菩提心行というものが菩提心によつて起すところの諸行ではなく、菩提心それ自體を行として扱ふ法然の釋を難するのである。明恵の斯様な批判態度は、彼が「言^ハ菩提^者即^佛、佛果^{一切}智^々、言^レ心^者於^三此^{一切}智^々起^ス求^心、指^シ此^言菩提^心也^也」と述べる如く、菩提心とは菩提を達成せんとする心、即ち成佛を期する心として定義づける立場からなされているものと考えられる。これに對し法然の強調する生死輪廻からの解脱は、「成佛はかたしといへども往生は得^ヤす^キ」きが故に「愚痴にかへりて極樂にむまる」淨土門の立場に於て宣揚されるのであり、これは菩提心が「一切智々に於て起す希求心」に他ならないとする明恵の理智的な信の態勢とは著しい對稱を見せるのである。

法然の教説にあつては、菩提心が成佛の爲の不退の信を要求するものである限り、それは末代の凡夫にとつて修し難い「行」であると思ふ、彌陀の本願を憑み西方の淨土を願求する者の信の態勢を三心の具足によつて決定づけようとしたと見られる。

斯様に法然が三心を具足して往生を願ひ、明恵が菩提心を基盤として成佛を期せんとした各々の立場は、彼等の淨土教思想に直接の影響を及ぼした善導の「菩提心^者先^レ他^方期^佛果^三心^者先^レ自^正期^往生^二」との見解に遡ることができるのである。

以上、法然、明恵の人間觀、社會觀を通して三心、菩提心へ連る彼等の信の様相を考えてみたが、法然の「このごろのわれらは智慧

のまなこしゐ、行法の足なへたるともがらなり、聖道難行のけはしき道には惣じてのぞみを絶つべし^⑩」いう自力の可能性に對する限界の認識、そして「世間の無常なることを思ひてこの世のいくほどなきことを知れ^⑪」として現世を「すぐべきもの」と觀する立場は、三心を具足して彌陀の本願を一筋に憑む信へと直進するのであり、明恵にあつては「佛法修行ハ、ケキタナキ事カアルマシキ也……カナハヌマテモ、佛智ノ如ク一事ヲモ知ント思フヘシ」と述べる如く、佛道の修行に臨んでは自己の可能性を究極まで試さんとする意欲に満ちているのであり、そこに強い現實肯定の立場から菩提心という不退の信を基盤として佛果をせんとする信の態勢が確立されてくるのである。

- 1 和語燈錄 卷五
- 2 3 明恵上人遺訓
- 4 大日本史料 五編ノ七 六〇二頁
- 4 四十八卷傳 卷四十五
- 5 六日本史料 五編ノ七 五九四頁
- 6 摧邪輪 卷上
- 7 四十八卷傳 卷十四
- 8 四十四卷傳 卷二十一
- 9 觀經疏 玄義分
- 10 和語燈錄 卷二
- 11 和語燈錄 卷四
- 12 大日本史料 五編ノ七 五九六頁